証①

　「わたしはあなたたちの老いる日まで白髪になるまで、背負っていこう。わたしが担い、背負い、救い出す」これは私が好きな聖句です。

　私の祖母は、私が小学校六年生の頃から癌で入院していました。私は幼いころからよく祖母の家に行っており、幼稚園の帰りのバスで祖母の家に行ったり、祖母の後をついて回ったりとおばあちゃん子でした。そんな祖母がステージ四の癌だと聞かされ、とてもショックで泣いていました。余命宣告もされました。このことを知って一番ショックを受けたのは、祖母自身であるのに、その頃の私はそんな事も考えることができませんでした。入院している祖母のお見舞いに初めて行ったとき、もう少しで旅立ってしまう祖母を前に涙目になってしまいました。それに気づいた祖母に「大丈夫だよ。」と言われ、一番辛い思いをしている祖母にそんな言葉を言わせてしまったと反省もしました。それからは、祖母の前では泣かないようにしよう。そして毎日お見舞いに行こうと決め、休みの日は朝から母が仕事から帰ってくるまでの時間を一緒に過ごしました。特別に何かをするのではなく、ただ一緒にいて、テレビを見て、お話をして、今まで通りの一日を送り、祖母との思い出を作りました。中学校に入学してからは帰りが遅く、短時間しか会うことができない日が多くなり、祖母の安否が気になる日々を過ごしていました。お見舞いに行くと嬉しそうにしている祖母、しかし目が赤くなっていることが多くありました。冬の日の早朝、祖母が亡くなったと聞かされ、状況を理解することができませんでした。亡くなった祖母に会い、触れた時、まだ温かくただ眠っているようで信じられませんでした。その日は一日中泣いていたように思います。寂しさや悲しみから元気が出ず、笑顔すらできなかった時に出会ったのが冒頭の「わたしはあなたたちの老いる日まで白髪になるまで、背負っていこう。わたしが担い、背負い、救い出す」という聖書箇所です。これを読んだ時自然と涙が溢れてきました。十五年間生きてきて、祖母の死の悲しみ、人間関係での悩みの中にあった時、母や先生、友達は話を聞いてくれますが、自分ですべてを伝えることができませんでした。私自身が伝えないだけなのに孤独を感じる時もありました。そんな時でもイエス様は私と一緒にいてくださり、私が辛い時は背負ってくださり、いつも私のペースに合わせて歩いてくださっているということ、その状況から救ってくださるということを学びました。

　尚絅に入学していなかったら孤独を感じ続け、一人ではないということを学ぶことができなかったと思います。私は将来、病院薬剤師になろうと思っています。病院薬剤師は薬局薬剤師とは少し異なり、救急救命業務があります。患者さん一人一人とよりかかわることができるので、イエス様からの愛をたくさんの人々に分け与え、伝えていきたいと思います。